教員養成系大学における人間関係能力と教育力の育成 (3)

—教育効果の長期・縦断的検討—

○阿部慶賀¹・吉澤寛之¹・秋山晶則¹・佐藤善人¹・玉井颯一²

(¹岐阜聖徳学園大学・²名古屋大学)

キーワード：人間関係能力，教育力

Development of Educational Ability and Interpersonal Skills at Teacher Training College (3):

A Longitudinal Study of Educational Effect

Keiga ABE¹, Hiroyuki YOSHIZAWA¹, Masanori AKIYAMA¹, Yoshihito SATO¹, and Ryuichi TAMAI²

(¹Gifu Shotoku Gakuen Univ., ²Nagoya Univ.)

Key Words: Interpersonal Skills, Educational Ability

目 的

大学における「学士力」を備えた人材養成においては、学習に対する主体性や、コミュニケーション能力などの「人間関係能力」が不可欠である。先行研究（吉澤他, 2012）では、教員養成系大学教育学部での「人間関係能力」育成の意識的な取り組みとして、近隣小学校などの多様な実践フィールドを活用した人間関係能力育成のためのカリキュラムを導入している。このカリキュラム導入の効果については、社会的自己制御 (Social Self-Regulation) (以下 SSR と表記) 原田ら, 2008), 大学適応感, 教員就職意欲 (吉澤・西川, 2008) を指標とした効果測定の経時変化において、一定の効果が確認されている (高村他, 2012)。ただし、先行研究での効果測定は、カリキュラム導入前の学生と導入後の学生との比較を主たる目的とした単年次に限定したものであった。そこで本研究では、複数年次にわたる長期的教育効果の変化を比較し、カリキュラムの効果を再検討した。

方 法

岐阜県 G 大学教育学部に入学した 738 名 (男性 264 名・女性 378 名・不明 96 名) を対象とした。効果測定の指標としては、先行研究との対応を踏まえて SSR, 大学適応感, 教員就職意欲を用いた。また、自己対処および他者対処の特性を測定できるエゴグラムである IUE (I and U Egograms), 下位因子の一つである不適応傾向を採用した。

結 果

本稿では紙面の制約から、調査結果の中で研究目的との関連が特に強い分析結果に限定して報告する。調査時期を独立変数, SSR 全体と下位因子, IUE 不適応傾向, 大学適応感全体と下位因子, 教員就職意欲を従属変数とした被験者内 1 要因分散分析を行った (表 1)。分析の結果, 各従属変数で有意差が認められた (SSR: $F(7, 1127)=5.807, p<.01$, 自己主張:

$F(7, 1036)=3.977, p<.01$, 持続的対処: $F(7, 1036)=4.236, p<.01$, 感情欲求抑制: $F(7, 1127)=3.281, p<.01$, 不適応傾向: $F(7, 1029)=3.288, p<.01$, 大学適応感: $F(7, 1008)=14.74, p<.01$, クラス親密感: $F(7, 1008)=5.295, p<.01$, 課程帰属感: $F(7, 1008)=11.782, p<.01$, 集団運営感: $F(7, 1001)=16.897, p<.01$, 教員就職意欲: $F(7, 1036)=4.236, p<.01$)。

SSR と自己主張, 感情・欲求抑制では, 2009 年度前期終了時が最も低く, 2011 年後期開始時が最も高い。この差は多重比較においても有意差が認められている ($p<.01$)。IUE 不適応傾向も 2009 年度前期終了時が最もネガティブな評価となっている。持続的対処は 2010 年度前期終了時が低い一方で, 2011 年度後期開始時が最も高く有意差が見られた ($p<.01$)。

クラス親密感, 集団運営感, 教員就職意欲については, いずれも 2010 年度前期開始時まで低い評定値を維持し, その後向上するといった変化を示した。課程帰属感も 2011 年度までは大きく向上するが, クラス親密感, 集団運営感, 教員就職意欲に比して上昇する時期が遅い。

考 察

本研究の結果から、先行研究でのカリキュラムが集団適応感や教員就職意欲の長期的維持や向上に有効であることが示された。ただし、単調な向上ではなく、ほぼすべての指標において低迷, 下落する時期が見られた。その時期としては前期終了時あるいは後期開始が多く、前後期の間にある長期休業時など、大学生活から気持ちが離れやすい時期であることが影響している可能性がある。また、クラスや集団への帰属意識や教員就職意欲の向上に時間がかかっており、より早い時期からの向上が望まれる。今後はそのための改善手段として、これらの結果をポートフォリオとして学生にフィードバックした場合の影響についても検討したい。

表 1. 2009 年度から 2011 年度までの SSR, IUE 不適応傾向, 大学適応感, 教員就職意欲の平均値推移 (括弧内の数値は標準偏差)

年度	2009年度			2010年度			2011年度	
時期	前期開始	前期終了	後期開始	前期開始	前期終了	後期開始	前期開始	後期開始
SSR	3.396(0.384)	3.373(0.46)	3.411(0.38)	3.396(0.384)	3.426(0.414)	3.452(0.4)	3.466(0.392)	3.499(0.413)
(自己主張)	3.13(0.47)	3.109(0.598)	3.13(0.52)	3.13(0.47)	3.181(0.488)	3.195(0.481)	3.195(0.459)	3.22(0.478)
(持続的対処, 根気)	3.601(0.558)	3.627(0.578)	3.647(0.529)	3.601(0.558)	3.583(0.576)	3.63(0.574)	3.69(0.602)	3.756(0.587)
(感情, 欲求抑制)	3.6(0.508)	3.524(0.574)	3.608(0.535)	3.6(0.507)	3.594(0.571)	3.642(0.541)	3.636(0.552)	3.665(0.592)
IUE 不適応傾向	2.929(0.928)	3.026(0.893)	2.894(0.932)	2.929(0.928)	2.926(0.999)	2.838(1.007)	2.843(1.02)	2.77(1.03)
大学適応感	2.895(0.576)	2.892(0.584)	2.888(0.591)	2.895(0.576)	2.956(0.516)	2.986(0.525)	3.176(0.708)	3.183(0.664)
(クラス親密感)	2.958(0.711)	3(0.801)	2.945(0.738)	2.958(0.711)	3.026(0.594)	3.116(0.551)	3.179(0.896)	3.182(0.826)
(課程帰属感)	3.051(0.611)	3.064(0.801)	3.047(0.637)	3.051(0.611)	3.048(0.7)	3.007(0.719)	3.342(0.769)	3.353(0.705)
(集団運営感)	2.62(0.664)	2.54(0.592)	2.609(0.656)	2.62(0.664)	2.752(0.59)	2.788(0.566)	2.957(0.729)	2.962(0.707)
教員就職意欲	3.071(0.579)	3.099(0.624)	3.095(0.615)	3.071(0.579)	3.107(0.618)	3.149(0.626)	3.325(0.749)	3.342(0.745)